

# J.LEAGUE™ NEWS



2012 Jリーグ  
ヤマザキナビスコカップ

FINAL  
20th Anniversary



「大一番」

© J.LEAGUE PHOTOS

© J.LEAGUE PHOTOS

清水の大前(左)と鹿島の大迫。準決勝でも活躍した若きストライカーに懸かる期待も大きい(写真はそれぞれ準決勝のホームゲームより)

## 決勝は清水エスパルス vs 鹿島アントラーズ

11月3日(土・祝)、国立競技場が舞台。20回目の大会で栄冠に輝くのはどちらのチームか

2012 Jリーグヤマザキナビスコカップの決勝のカードが、清水エスパルス vs 鹿島アントラーズに決まった。ホーム&アウェイによる準決勝で、それぞれFC東京、柏レイソルに競り勝ってファイナルへの切符を獲得した。記念すべき20回目の開催を迎えているヤマザキナビスコカップで栄冠に輝くのは、1996年以来となる2回目の優勝を目指す清水か、それとも2連覇、大会史上最多の5回目のタイトル獲得を狙う鹿島か。また、決勝前夜祭で発表される恒例の「ニューヒーロー賞」を手にするのはどの選手か。クライマックスが近づくとつれ、期待と注目はいやが上にも高まる。(2~3、8ページに関連記事)

J.LEAGUE™ TOP PARTNERS

Calbee

Canon

KONAMI

AiDEM

Coca-Cola

McDonald's

JCB

J.LEAGUE™ 100 YEAR  
VISION PARTNER

朝日新聞

J.LEAGUE™ FAIRPLAY PARTNER

東京エレクトロン

LEAGUE CUP SPONSOR

ヤマザキナビスコ

SUPER CUP SPONSOR

FUJI XEROX

J.LEAGUE™ OFFICIAL  
EQUIPMENT PARTNER

adidas

J.LEAGUE™ OFFICIAL  
SUPPLIER

Johnson & Johnson

J.LEAGUE™ OFFICIAL  
BROADCASTING PARTNER

スカパー!

SPORTS PROMOTION  
PARTNER

TOYO

J.LEAGUE™ OFFICIAL  
TICKETING PARTNER

ぴあ

# Interview

インタビュー



リーグカップスポンサー  
ヤマザキナビスコ株式会社  
飯島 茂彰 代表取締役社長に聞く

リーグ戦の開幕に先立ち、1992年にスタートした「Jリーグヤマザキナビスコカップ」が、記念すべき20回目の開催を迎えている。リーグカップスポンサーとして支援を継続するヤマザキナビスコ株式会社の飯島茂彰 代表取締役社長は、自身も第1回から大会の発展に尽力し、Jリーグの歴史に足跡を残してきた。今やサッカーが「最も身近なスポーツ」と語る飯島社長に、大会の歩みを振り返ってもらった。

※このインタビューは2012年10月2日に実施しました。

## 「各チームが地域のファン・サポーターと一体になって、晴れの舞台を目指してほしい」

### 会社の知名度が上がったことを実感

—— Jリーグヤマザキナビスコカップが、今回で20回目の開催となり、間もなく決勝を迎えます。長きにわたって特別協賛として大会をサポートしてきたことについて、どのような感想を持っていますか。

「平たんではなかったですが、弊社の業績もそこそこに推移し、最終的には製品を購入していただく消費者の皆さまのサポートのおかげだと思っています。サッカーは野球と肩を並べるまでの人気スポーツになりました。その意味では、こちらも恵まれていました」

—— どのような経緯で大会の支援を始めたのですか。

「個人的には当時、野球に続いてプロ化が成功するスポーツは何かと考えていました。そして、やはり世界的に競技人口が最も多いサッカーかな、と思っていました。そのような時に、広告代理店から新たに始まる Jリーグがリーグカップ戦のスポンサーを探しているという話を聞きました。その担当者の方が、たまたまいとこの同級生だったという縁もあって、あらためて話を聞いたところ、Jリーグの方でも検討して弊社にスポンサーしてもらいたい、ということでした。Jリーグは若い人たちをターゲットにしたことも

あり、お菓子の会社ならびつたりなのでは、といった話も伺い、特別協賛することが決まりました」

—— 大会を特別協賛する以前、飯島社長とサッカーとのつながりは、どのようなものでしたか。

「サッカーに関しては、ほとんど接触がありませんでしたが、国外では非常に盛んなスポーツだという感触は、かなり前から持っていました。というのは、私はかつて山崎製パンにいたころ、1967年か68年だったと思いますが、英国へケーキ作りの研修に出掛け、サッカーのサポーターが熱烈にホームチームを応援する姿を目の当たりにしたことがあります。チームが負けたとしても、一緒に頑張るという意識が強かったのが印象的でした。今では大会と20年以上、関わってきたこともあり、最も身近なスポーツになっています」

—— ヤマザキナビスコカップの支援によって、社業への変化はありましたか。

「最初の3年間は、大会がすごく盛り上がりました。ヴェルディ川崎(現 東京ヴェルディ)の3連覇からスタートして、野球以外のスポーツでこれほど盛り上がるスポーツがあるのか、という感じでした。それまでゴルフの大会を共催としてスポンサーしたことはあったのですが、これ

ほど多くの人々の話題となり、多くの入場者を集めたことはありませんでした。また、会社の知名度が上がったことも、強く実感しました。93～94年に学卒の入社希望者が一気に増え、面接などでも大会の話題が出たようです」

### JリーグやJクラブも頑張っている

—— 大会のサポートを続けて20年以上が経過しました。その間、喜びもご苦労もあったと推察します。



V川崎と清水が対戦した第1回大会の決勝 ©Agence SHOT



## ヤマザキビスコ

### ヤマザキビスコ株式会社

菓子業界では初の日米合弁企業として、1970年10月に設立。ビスケット、スナック、キャンディ、チョコレートなどの製造販売を行う。創業当時のロングセラー商品である「リッツ」をはじめ、「チップスター」「オレオ」など「高品質でおいしい製品の提供」という基本姿勢を一貫して守り続けてきた。一方、Jリーグヤマザキビスコカップをはじめとしたスポーツ文化イベントの展開、地球環境問題、途上国の開発援助活動の支援などにも積極的に取り組んでいる。従業員数は約千人。

「盛り上がった3年の後はブーム的な人気も一段落して落ち着きました。大会を支援するに当たって『最初の3年間は、どんなことがあってもサポートする。次の3年間は、状況をしっかりと見極めよう』というスタンスでした。確かに6年を経過しても、開幕当初のような人気は回復しませんでした。JリーグやJクラブの皆さんも頑張っている。私どもも『ここまで支援してきたのだから、これからも継続していこう』ということで、現在に至っています」

——これまで印象に残る大会、チームなどはありますか。

「かつては決勝で戦うのは、ほとんどが関東地方、静岡県にホームタウンを置くクラブでした。それが、2007年にガンバ大阪が優勝して初めてカップが天竜川を越え、翌年は大分トリニータが勝って一気に関門海峡を越えました。大分からは数多くのファン・サポーターが決勝の舞台となる国立競技場へ足を運び、地元では地域の活性化につながったと聞いています。スポンサーとしては、フェアでいい試合をしてもらえば、どのチームが勝ってもいいのですが、地方への効果があれば大きいというのを実感したのは、その時が初めてでした」

——ファイナルの雰囲気は独特ですね。

「春に大会が開幕し、長く厳しい戦いを勝ち抜いてたどり着いた舞台ですから、選手もファン・サポーターも特別な思いがあるでしょう。私も何万人もの前に出るのは、その時ぐらいですからね(笑)。勝負にはどうしても勝者と敗者があるから、敗れたチームは残念な思いを味わいます。しかし、10年の決勝で敗れたサンフレツ

チェ広島のペトロヴィッチ監督(現 浦和レッズ監督)は『準優勝でも非常に誇りに思う。東京でお祝いの会をしてから広島に帰る』と言っていました。あれはスポーツマンシップにあふれたさわやかな感想で、スポンサーとしても、うれしかったですね」

### Jリーグの果たした役割の大きさ

——ヤマザキビスコカップは「ニューヒーロー賞」を設けるなど、若手選手がチャンスをつかむためにも重要な大会となっています。「その年の大会を通じて最も活躍が顕著な23歳以下の選手を、目が肥えたメディアの方々の投票を基に決めるので、確かなヒーローが選ばれていると感じています。大会はリーグ戦と並行して行われ、その間には試合も多く、レギュラークラスがけがをして欠場することもあります。そのような場合に若い選手に出場機会が巡ってくる可能性もあり、幅広くチャンスを与えることができるようになりました。これはJリーグが考案した賞で、素晴らしいことを実行してもらったと感謝しています。決勝前夜祭ではニューヒーロー賞の表彰を行います。翌日の試合ではその選手がどのようなプレーをするか、大いに注目しています」



©J.LEAGUE PHOTOS  
昨年の決勝前夜祭で浦和の原口を表彰する飯島社長

——また、優勝チームには南米のクラブチャンピオンと戦う機会が与えられます。

「国際経験を重視するJリーグの発案で実現したものです。出場チームにとっては、非常にいい刺激となっているのではないのでしょうか。試合数が多ければ、それだけ経験を積む機会も増えるし、国際試合という異なる状況であれば、さらに貴重な経験になると思います」

——この20年余り、Jリーグの発展で最も著し

いのは、どのような点だと思いますか。

「まずは、プレーのレベルアップでしょう。日本代表はFIFAワールドカップに4大会連続して出場し、今回の最終予選も出場権獲得へ好位置にいます。さらに海外の、それも名門と呼ばれるクラブで活躍する選手も増えました。Jリーグ創設以前とは隔世の感があり、Jリーグの果たした役割の大きさが分かります。彼らもJリーグから巣立ち、それに続けたいと夢見る選手も数多いと思います。チャンスがあるので、頑張りがいがあるでしょう。また、若い世代の競技人口が飛躍的に増えました。かつては夢だった、サッカーのプロ選手として生活できる道が開けた。これもJリーグ創設の大きな効果です」

——今後のヤマザキビスコカップに対する思いはありますか。

「Jリーグがしっかりと運営を行い、とてもいい状況で、安心して見ていることができます。ますます発展していくでしょう。先ほども話しましたが、大分がどのチームにも優勝するチャンスがあることを証明してくれました。各チームが地域のファン・サポーターと一体になって、晴れの舞台を目指してほしいと思います。サッカーも含めてチームスポーツは、勝っているチームを変えるのは難しいのではないのでしょうか。しかし、強さを維持するためには、新陳代謝も必要だと思います。世代交代を円滑に進め、選手層を厚くするためにも、各チームがこの大会を生かしてもらえば、と考えています」

### 飯島 茂彰(いじま しげあき)

1945年10月7日生まれ。

1966年4月に山崎製パン株式会社に入社。70年11月にヤマザキビスコ株式会社に入社。その後、米田ナビスコ社への派遣、ヤマザキビスコ株式会社のマーケティング部長、取締役マーケティング部長、常務取締役を歴任し、86年2月に代表取締役社長に就任した。現在は、財団法人飯島記念食品科学振興財団評議員、公益財団法人国際開発援助財団理事なども務める。2005年11月には藍綬褒章を受章した。



©J.LEAGUE PHOTOS

飯島社長の印象に残る試合の一つが2008年の決勝。大分から多数のファン・サポーターが国立競技場へ足を運び、「地方への効果の大きさを実感した」という

# クラブライセンス交付第一審機関（FIB）による 2013シーズン Jリーグクラブライセンスの交付について

Jリーグは9月28日、2013シーズン Jリーグクラブライセンスの交付発表、および説明会を実施した。申請した42クラブのうち、33クラブに J1クラブライセンス、8クラブに J2クラブライセンスが交付され、JFLに所属するカマタマーレ讃岐は9月18日付で申請を取り下げた。

クラブライセンス交付を受けたクラブのうち、大分トリニータは、Jリーグから受けた融資の返済が10月12日に完了したため、J1昇格資格を有することになった。Jリーグ準加盟クラブのV・ファーレン長崎は、JFLにおける順位などの要件を満たした後、Jリーグ理事会の入会審査に合格することによって、ライセンスが正式に発効する。

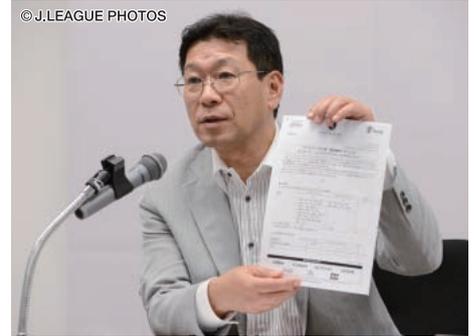
J1とJ2のクラブライセンスの分岐点は、前者が1万5000人以上、後者が1万人以上というホームスタジアムの入場可能数。ただし、これらはJリーグクラブライセンス制度によって

新たに設けられた基準ではなく、従来からJリーグ規約に明記されているものである。

クラブライセンス制度は、アジアサッカー連盟（AFC）が加盟国に対し、AFCチャンピオンズリーグの参加資格を定めるために導入すると通達したのを受けて、日本サッカー協会よりライセンス業務に関する権限の委任を受けたJリーグが作成に携わった。

審査の基準は、競技、施設、人事体制・組織運営、法務、財務の5つで、合計56項目。それぞれの項目が、A（達成必須）、B（未充足の場合は制裁の上、ライセンス交付）、C（達成推奨）の3等級で判定される。交付判定については、弁護士、公認会計士、有識者合わせて10人からなる第三者機関のクラブライセンス交付第一審機関（FIB）が行う。

説明に臨んだ大河正明クラブライセンスマネージャーは「ことしから始まったばかりだが、高いハードルがあると感じたのは、5基準のうち



© J.LEAGUE PHOTOS  
Jリーグクラブライセンスの交付について、説明を行うJリーグの大河クラブライセンスマネージャー

施設と財務。だが、スタジアムは各地で新設、大規模改修の動きがあり、前向きに取り組んでいきたい。財務面については、クラブが正面から取り組み、改善への姿勢を確認できた」と、これまでの過程を振り返った。

今後、クラブはライセンスの申請を毎年行い、審査を受ける。

## ■判定結果

### (1) ライセンス交付の可否および交付されたライセンスの種類

	J1クラブライセンス	J2クラブライセンス	合計
判定	33 札幌、仙台、山形、鹿島、栃木、浦和、大宮、千葉、柏、F東京、東京V、川崎F、横浜FM、横浜FC、湘南、甲府、松本、新潟、富山、清水、磐田、名古屋、京都、G大阪、C大阪、神戸、岡山、広島、徳島、福岡、鳥栖、熊本、大分	8 水戸、草津、町田、岐阜、鳥取、愛媛、北九州、長崎	41
(うち、条件付き交付)	(1) 大分	(1) 長崎	(2)

※申請42クラブのうち、1クラブ（讃岐）は申請取り下げ

### (2) B等級基準の充足状況

	J1クラブライセンス	J2クラブライセンス	合計
B等級充足	4	1	5
B等級未充足（文書提出）	29	7	36
合計	33	8	41

### (3) FIBからの経営上の指導

	J1クラブライセンス	J2クラブライセンス	合計
是正通達+個別通知	2	2	4
是正通達	4	1	5
個別通知	5	4	9
指導なし	22	1	23
合計	33	8	41

## 《参考》

### ■クラブライセンスの種類

Jリーグクラブライセンスには右記の2種類があり、審査をクリアすれば、いずれかのライセンスが交付される。

ライセンスの種類	内容
J1ライセンス	順位などの要件を満たしていれば、2013シーズンはJ1に残留または昇格することができる。
J2ライセンス	順位などの要件を満たしていれば、2013シーズンはJ2に残留または昇格することができる（J1に昇格することはできない）。

### ■判定に付帯する事項

#### (1) 条件付き交付判定

9月末時点でライセンスは交付されるが、別途定められた条件を満たす必要がある。特に準加盟クラブは、クラブライセンス交付を受けた後、入会審査を受けて審査に合格しなければJ2入会（昇格）ができない。

項目	内容
条件付き交付	別途定められた条件を満たす必要がある。 ※対象：大分（融資の返済）、長崎（J2入会審査に合格）

#### (2) B等級基準未充足

ライセンス基準のうち「B等級」に指定されている基準（3つ）については、それを充足していなくてもライセンスは交付される。ただし、クラブライセンス交付規則第7条および第15条に基づき、B等級の基準の一つでも充足していないクラブには、ライセンス交付と同時に制裁を科すこととなっている。

項目	内容
B等級未充足	B等級基準（特にスタジアムの屋根の大きさ・トイレの数）を充足していないクラブに対し、ライセンス交付と同時に制裁が科される。（※対象：36クラブ）

【注】クラブライセンス交付規則の用語上、「制裁」という厳しい言葉になっているが、本件における制裁の内容は「文書提出」である。具体的には「2013シーズンにおいて使用することを予定するスタジアムの衛生施設および屋根の不足を理由とする観客に対するホスピタリティの欠如に対し、クラブが実施している、または実施を予定しているホスピタリティ向上策について、2012年10月31日までに書面で回答すること（ライセンス事務局が受け付け、FIBへ送付）」となっている。

#### (3) クラブ経営上の指導

ライセンス判定には直接関係ないが、判定に際し、クラブに経営改善を促す目的で、FIBが独自に指導を行うことができる。指導には「是正通達」または「個別通知」があり、是正通達の方が重い指導となる。また、クラブの経営状況に合わせ、是正通達と個別通知の両方を出すこともある。

項目	内容
是正通達	ライセンス交付判定に付帯して、クラブ経営上、是正すべきと思われる点について、FIBが対象クラブに通達を出す。通達の内容は公表する。（※対象：9クラブ）
個別通知	是正通達とまではいかないが、FIBからクラブ経営上、改善を要請する旨の指摘があった場合、それを受けたライセンスマネージャーが対象クラブに個別に指摘事項を通知する。（※対象：13クラブ）

## J2で甲府の2位以内が確定

J1、J2とも終盤を迎えるリーグ戦で10月14日、J2のヴァンフォーレ甲府がJ1への昇格条件の一つとなる2位以内を確定した。第38節の試合で暫定2位の湘南ベルマーレとホームで対戦した甲府は、先行を許す展開も2-2の引き分けに持ち込み、勝点を78とした。この結果、甲府を勝点で上回る可能性があるチームは、京都サンガF.C.のみとなった。甲府は湘南戦で20試合連続無敗という

J2新記録も達成し、今シーズンからチームの指揮を執る城福浩監督は「積み上げてきたものを発揮できた」と胸を張った。

一方、勝点が接近する2位以下のチームは、節ごとに順位が目まぐるしく入れ替わる接戦を繰り広げている。甲府に続く自動昇格圏内、そして3～6位のチームに出場資格があるJ1昇格プレーオフを目指す戦いは予断を許さない。今シーズンは残留争いも絡み、11月11日

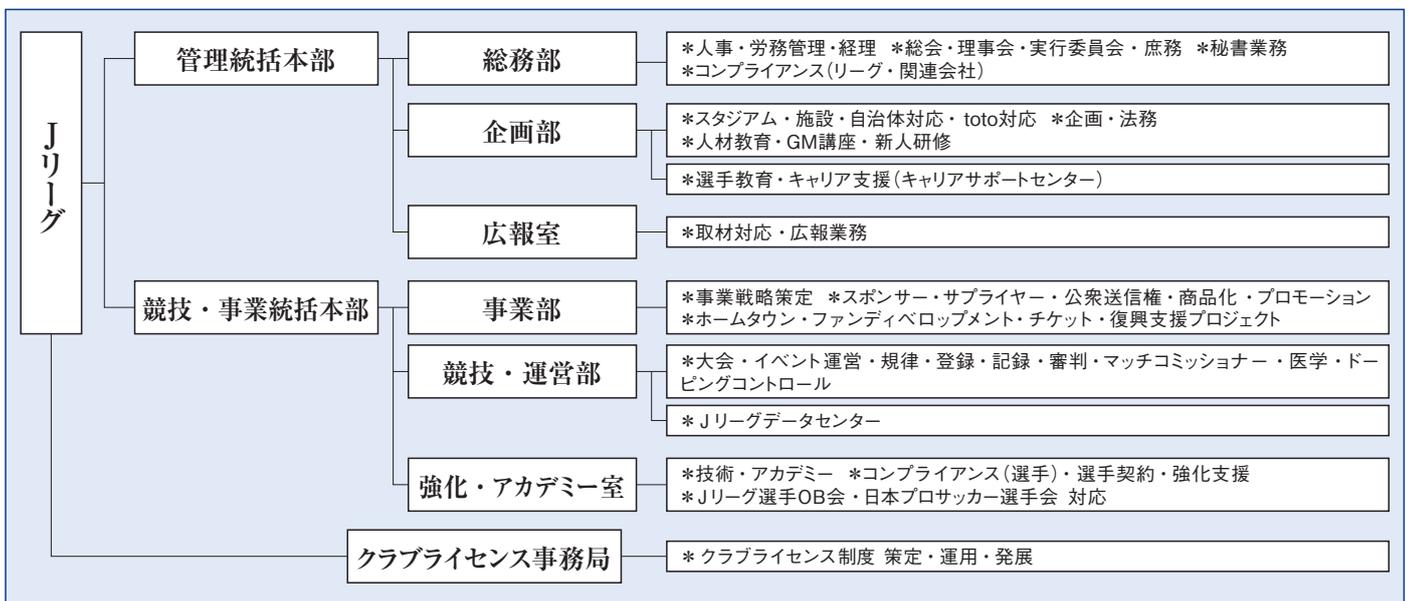


2位以内確定を喜ぶ甲府の城福監督(右から4人目)ら

の第42(最終)節まで目が離せない戦いが続きそうだ。

## 公益社団法人 日本プロサッカーリーグの組織変更

公益社団法人 日本プロサッカーリーグは10月1日付で組織変更を行った。



### ダノンネーションズカップ 2013 in JAPAN を後援

Jリーグは10月16日の理事会で「ダノンネーションズカップ2013 in JAPAN」(主催:ダノンネーションズカップ2013 in JAPAN実行委員会)を後援することを決定した。本大会は、世界大会でプレーできる切符を手にする機会を日本の子どもたちに広く提供し、少年少女のサッカーレベルの向上および交流と親睦を図り、フェアプレー精神、健全な心身、社会貢献など人間形成の場にすることを目的に開催。予選大会、決勝大会は、2013年3月に行われる。

### マルハンカップ 第18回日本電動車椅子サッカー選手権大会を後援

Jリーグは10月16日の理事会で、同27、28日に障害者スポーツ文化センター「横浜ラポール」メインアリーナで開催の「マルハンカップ 第18回日本電動車椅子サッカー選手権大会」(主催:日本電動車椅子サッカー協会)を後援することを決定した。この大会は、日本国内において、電動車椅子サッカーの普及振興、技術向上を図ることを目的に開催されている。

### 第5回全国スポーツクラブサミットを後援

Jリーグは10月16日の理事会で、11月10日(土)、11日(日)に国立オリンピック記念青少年総合センター(国際交流棟1階 国際会議室)で開催する「第5回全国スポーツクラブサミット」(主催:公益財団法人日本スポーツクラブ協会)を後援することを決定した。本サミットは、全国に各種のスポーツクラブを普及・育成するための事業の一環として開催している。

### 功労選手賞について

Jリーグは10月16日の理事会で、元Jリーグ選手の藤田俊哉氏、田中誠氏に対し、功労選手賞として表彰することを決定した。表彰式は、12月3日(月)に開催される2012 Jリーグアウォーズで実施される。

#### 功労選手賞

**藤田 俊哉**(ふじた としや) 1971年10月4日生まれ(41歳) 出生地:静岡県 ポジション:MF  
[所属クラブ] 1994~2005年 ジュビロ磐田(J/J1)、2005~08年 名古屋グランパス(J1)、2009~10年 ロアッソ熊本(J2)、2011年 ジェフユナイテッド千葉(J2) ※2003年 ユトレヒト(オランダ)

**田中 誠**(たなか まこと) 1975年8月8日生まれ(37歳) 出生地:静岡県 ポジション:DF  
[所属クラブ] 1994~2008年 ジュビロ磐田(J/J1)、2009~11年 アビスパ福岡(J1/J2)

### 2013シーズン Jリーグ全チームユニフォームに「Jリーグ20周年ロゴワッペン」を掲出!

Jリーグは、2013年5月にリーグ戦開幕20周年を迎えることを記念して、2013シーズンにおけるJ1、J2リーグ全40チームのユニフォームに、「Jリーグ20周年ロゴワッペン」を掲出することを決定した。ワッペンには、Jリーグロゴの下に20周年を表す「J.LEAGUE 20th Anniversary」と記載されており、ユニフォームの右そで部分に掲出する予定。Jリーグとして記念ワッペンを掲出することは開幕以来、初めてとなる。



## Jクラブと歩む「地域」「ひと」

35

ベガルタ仙台



## 選手を応援するユニークな取り組み。 ホームタウンに匹敵する熱気を生み出す

### 選手と同名の縁で後援会を結成

ベガルタ仙台のホームタウン、仙台市から南へ40kmにある宮城県角田市に、ユニークで夢のあるサポーター集団がいる。

「角田で角田誠選手を応援する会」

「角田(かくだ)」という同名の縁で、2011年に加入したDF角田誠選手に声援を送ろうと、角田市にゆかりのあるサポーターらが昨年5月、後援会をつくった。約160の個人・団体会を構成する。会の代表の佐藤武平さんが「名前が同じという理由だけで角田選手と交流できたら面白い。角田選手を応援することでサッカーファンの裾野を広げ、街のPRもできる」と思い付き、サポーター仲間の角田市政策企画課の藤巻和広さんに話を持ち掛けたのがきっかけだった。

応援する会発足以来、角田市とクラブとの交流は一気に深まった。サッカー教室、スタジアムでの物産展、チアリーダー教室など計18度(ことし8月現在)、月に一度のペースで市、クラブ、市民が連携したイベントを繰り返している。

市はことし6月、市役所1階の待合室に角田選手を紹介する展示スペースを設置した。サイン入りのボールにスパイク、応援する会特製のTシャツや旗も飾っている。藤巻さんは「スタジアムで応援することが全てではない。関心を持ってもらうことが大切だ」と狙いを語る。角田選手がゴールを決めた際には角田市産の米30kg、アシストには農産物をそれぞれ本人にプレゼントするというユニークな企画もある。賛同したのは地元農協。一選手に対する応援は、街全体を巻き込んだ取り組みに発展している。

応援する会は5月、角田選手を招いた激励会を開催。約130人が集まって交流を深めた。佐藤さんは「角田選手のホームタウンは角田市だ!という気持ちを持って、会員みんなで角田選手とベガルタ仙台を応援できている」と強調。応援する会副代表の曾我清一さんも「おらがチームという気分を味わえる」と胸を張る。

### 新たな地域との交流が盛んに

Jクラブとの交流を機に地域おこしも加速する。角田市には市が出資する第三セクター鉄道、阿武隈急行が走る。全国の地方鉄道と



角田市役所1階に設けられた角田選手の展示スペースで記念撮影をする曾我清一、藤巻和広、佐藤武平の各氏(左から)



角田市での激励会に参加した小学生らと談笑する角田選手

同様に、少子高齢化や車社会が進み年々利用客は減少。厳しい経営を続けている。市と応援する会は阿武隈急行に乗ってベガルタの試合を観戦するツアーを企画。昨年は2度開催し、約130人が参加した。「鉄道に乗ることの楽しさと、目的地(ユアテックスタジアム仙台でのサッカー観戦)の魅力、両方を味わってもらえと思う。鉄道を利用することでベガルタだけでなく、阿武隈急行の応援にもつながった」と市角田ブランド推進課の中畑義巳課長。サッカーをきっかけとした地域の活動は盛んになっていく。

観戦した感動から行動して楽しむ流れも地域の中で浸透してきている。角田市の総合型地域スポーツクラブ「スポコムかくだ」ではサッ



中畑義巳氏

カー教室が大盛況。バドミントン、卓球など7競技ある教室の中で、1教室当たりの平均約20人を大きく上回る60~70人の小学生が集まる。昨年、応援する会の企画でベガルタ仙台によるチアリーダー教室が行われたことを受け、本年度、女子を対象にチアリーダー教室も新設された。

曾我さんは「角田市にはスポーツ少年団や中学校の部活動で野球のできる環境はあったが、サッカーができる環境は少なかった。子どもがサッカーに関心を持てる環境を待ち望んでいた」と今後の発展に期待を寄せる。

角田選手は「東北ならではの人の優しさを感じる。この機会に多くの人に角田市を知ってもらえたらうれしい。仙台から離れた街でもベガルタが愛されているのは、チームにとっても強みだと思う」と頼もしく感じている。

ベガルタ仙台にとっても角田市の取り組みは心強い。サポーター有志の市民後援会は仙台市と県北部の大崎市、気仙沼市に拠点をもち、角田市を含む県南地域は空白区だった。応援する会の旗揚げとともに、クラブと角田市との交流が盛んになったことで、クラブが県南の他の自治体と連携する動きも徐々に出てきた。

人口3万2000人の角田市。100万都市のホームタウン仙台に匹敵する熱が今、街中に漂っている。

(河北新報社 剣持 雄治)

「豊かで充実したスポーツ環境を実現し、地域に根差したスポーツクラブを中心に、日本にスポーツ文化を育む」ことを目指す「Jリーグ百年構想」のもと、Jクラブはそれぞれのホームタウンを中心に、さまざまな取り組みを行っている。そして、Jクラブの存在、活動は、地域とそこに暮らす人々に影響、刺激を与え、新たなムーブメントを生んでいる。Jクラブと手を携えながら、ともに歩む人々や、その活動を紹介するこのシリーズ。今号ではベガルタ仙台、ガイナレ鳥取と連携した地域の取り組みにスポットを当てた。



36

ガイナレ鳥取



## 相互の思いがしっかりと行き来。 強い絆でチームのテーマが根付く



ガイナレ鳥取応援書展には吉野智行選手も会場を訪れるなど、盛大に開催された

### 書展に選手の作品も展示

J2で2年目を戦うガイナレ鳥取。日本で一番人口の少ない鳥取県に初めて誕生したプロクラブとあって、地域の夢と希望が詰まっている。全国をつわものに負けるな、頑張れ。そして、みんなでもっと応援しよう——。展開されるイベントには、クラブに対する愛着が込められている。

J2参入を目指してJFLで戦い始めた2008年。鳥取県西部の米子市淀江町の小さな店のショーウィンドーに書が展示された。県内の書道に親しむ人やガイナレファンから寄せられた約400点。どの作品にもガイナレを応援するメッセージが力強く書かれていた。

企画したのは同市の書家、森田尾山さん。同年にガイナレのユニフォームの胸スポンサーの文字を揮毫したことがきっかけで試合を初めて観戦し、「自分にできることで応援する方法はないか」と考えついた。初めてにしては大きな反響。翌年からは実行委員会を立ち上げ、自ら委員長となって規模を拡大し、「ガイナレ鳥取応援書展」としてスタートさせた。

全県内、下は5歳から上は80歳の老若男女から、毎年1,500点もの作品が集まる。5年目となったことは書展だけでなく、ステージか

らも応援しようと「ガッツガイナレ応援フェスタ」と名前を変え、地元団体による和太鼓やミュージカルも披露された。書展も、今では出品のために授業で取り組む学校もあるという。

面白いのは、ガイナレの全選手の作品も展示されていること。選手とファン・サポーター、相互の魂のこもった筆文字のメッセージが並ぶ。来場者からは「県全体が一つになってガイナレを応援している。心が熱くなった」「サッカーはあまり分らなかったものの、書展を見て私の中でも灯がつかました」などの感想が寄せられた。「ガイナレがなければ、書を楽しむ人の発表の場も、親しむ場もなかった。気持ちを伝える場を与えてもらった。生活の中にガイナレが入ってきているし、応援のメッセージを書くことで自分への励みにもなる」と森田さん。作品にはチームへの期待感や関心の強さを感じられるといい、今後もイベントを継続し、楽しみながら応援の輪を広げていくことにしている。



森田尾山氏

### 身近にクラブを感じる

書展に遅れること1年、09年に鳥取独自のまた違った応援がスタートした。その名も「ガイナレ給食」。学校給食に使われている地元産の食材や、その栄養素の効果を学ぶ食育の推進役にガイナレの選手が抜てきされた。

チームの応援者でもあった鳥取市学校給食会の竹内亮二さんが考えた企画。サッカーボールをイメージしたミートボールや、チームカラーの

緑にちなんだグリーンカレーなどが、応援給食として鳥取市内の小、中学校40校で出された。

食材や栄養効果を説明した選手の声を録音し、給食に合わせて放送。チームスタッフや選手らも学校を訪れ、子どもたちと一緒に給食を食べるなどしている。

子どもたちからは「いい体験ができたし、給食メッセージもよく分かった」と好評。応援給食の翌週のホームゲームには、多くの子どもが来場する相乗効果も見られた。

2年目からは食育の比重を高め、選手が実践している食習慣や栄養素の説明を、映像資料としてDVDに編集して学校に配布。選手の思い出のメニューや岡野雅行選手の好きな食材で作った「野人鍋」などを献立に加えた。竹内さんは「身近にクラブを感じてもらえるし、Jリーグというプロで戦う選手のメッセージは子どもたちに訴えるものがある。ガイナレに代わる企画はない」と話す。

年に3回ほど行われているガイナレ給食。4年目となる今シーズンの最後は、11月の最終戦前に予定されている。現在は、市町村合併前の旧鳥取市内の学校に限られているだけに、「(鳥取市などを中心とする)全県がホームタウンだし、県全域に広がればいい」と竹内さんの夢は広がる。

地域から湧き起こった応援の機運は決して一方的ではなく、クラブや選手も関わり、相互の思いがしっかりと行き来している。小さな県だからこそ強い絆でつながる——。クラブのテーマ「強小」が、そこにしっかりと根付いている。

(新日本海新聞社 輔野 沙織)



竹内亮二氏



子どもたちと一緒にガイナレ給食を食べる鶴見聡貴選手

# 清水は第2戦で逆転、 鹿島は1勝1分で勝ち抜く

決勝  
11月3日(土・祝) 13:05 キックオフ  
— 国立競技場 —  
フジテレビ系列にて全国生中継



© J.LEAGUE PHOTOS  
チームの1、2点目をお膳立てした清水の高木。右はF東京の米本



© J.LEAGUE PHOTOS  
柏の猛攻をしのいだ鹿島。本田が柏の工藤と激しく競り合う

2012 Jリーグヤマザキナビスコカップの準決勝第2戦が10月13日に開催され、清水エスパルスと鹿島アントラーズが決勝へ駒を進めた。

アウェイの第1戦でFC東京に1-2と敗れた清水は26分、FW高木俊幸のクロスをFW大前元紀がヘディングで押し込み、均衡を破った。大前は後半にも2点を加え、「プロに入って初めて」というハットトリックを達成する大活躍。チームは3-0の快勝で対戦成績を1勝1敗とし、2試合合計スコアが4-2で4年ぶり、5回目の決勝進出を決めた。

一方、ホームの第1戦で3-2と勝利した鹿島は、第2戦もMFドゥトラ、FW大迫勇也が決めて、24分までに2点をリード。柏レイソルの猛反撃を受けて2-2の引き分けに持ち込

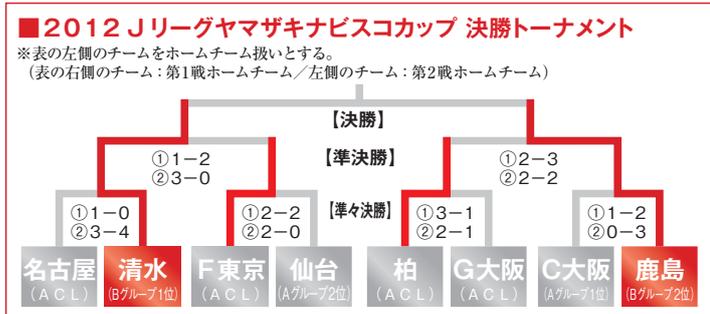
まれたものの、1勝1分の成績で2年連続、8回目の決勝へ進んだ。

各試合において活躍が顕著だった23歳以下(大会開幕時)の選手が選考対象となり、予選リーグから準決勝までの各試合会場で実施する報道関係者の投票を基に決定する「ニューヒーロー賞」は、11月2日(金)に行われる決勝前夜祭で発表される。過去には、受賞後に日本代表や海外のクラブで活躍する選手を生み出し、若手選手にとってはさらなる成長へ重要なステップとなる栄誉。優勝の行方とともに、ことしの受賞者が注目される。

予選リーグから準決勝の各試合会場で実施したスペシャルイベント「ナビスコキッズイレブンクラブ」といっしょにファイナルを目指そう!!は、延べ1万5899人が参加。2004年のイベン

ト開始からの累計は14万7904人となった。決勝に進出した両チームの予選リーグから準決勝までの各試合会場で、ゲームに参加した子どもたちの中から抽選で11名(合計22名)が招待され、決勝前に国立競技場のピッチで開催する「ナビスコキッズバトル」に参加する。

また、決勝ポスターのビジュアルをあしらった決勝のオリジナルデザインチケット(右)も、1万枚限定で発売された。



## 過去の「ニューヒーロー賞」受賞選手

※( )内は当時所属チーム

1996年 名波 浩(磐田) / 齊藤 俊秀(清水)	2004年 長谷部 誠(浦和)
1997年 三浦 淳宏(横浜F)	2005年 阿部 勇樹(千葉)
1998年 高原 直泰(磐田)	2006年 谷口 博之(川崎F)
1999年 佐藤 由紀彦(F東京)	2007年 安田 理大(G大阪)
2000年 鈴木 隆行(鹿島)	2008年 金崎 夢生(大分)
2001年 曾ヶ端 準(鹿島)	2009年 米本 拓司(F東京)
2002年 坪井 慶介(浦和)	2010年 高萩 洋次郎(広島)
2003年 田中 達也(浦和)	2011年 原口 元気(浦和)

